

都城市文化財調査報告書第37集

O H U R A - S I T E
大 浦 遺 跡

- 臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

1997年3月

宮崎県都城市教育委員会

卷頭口絵



遺跡遠景

序

この報告書は、道路建設事業「臨時地方道整備事業」に伴い、都城市教育委員会が都城市道路建設課の依頼を受けて発掘調査を行った、大浦遺跡の調査報告書です。

都城市は、宮崎県の南西部に位置し、東に鰐塚山系、北西に高千穂峰といった山々に囲まれた広大な盆地のほぼ中心部にあります。交通は、九州自動車道をはじめ、国道・主要地方道が縦横に延びており、南九州東部における交通・経済の要衝として栄えています。

さて、当市の埋蔵文化財発掘調査は増加の一途をたどっており、それに比例して調査の成果への関心も高まってきつつあります。埋蔵文化財をはじめとした多くの文化遺産が正しく後世へ伝わるように、今後ともこうした調査に対する関係機関の方々のより一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

本遺跡からは縄文・弥生の遺構・遺物が多数出土しており、これらが埋蔵文化財への理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究資料として活用していただければ幸いです。

最後に、猛暑の最中で発掘作業に従事していただいた市民の皆様をはじめ、現場における調査や出土資料の整理から報告書作成に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました関係各機関や多くの先生方に対し心より厚く御礼申し上げます。

1997年3月31日

都城市教育委員会

教育長 限 元 幸 美

例　　言

1. 本書は道路建設事業「臨時地方道整備事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事米澤英昭が担当した。
3. 調査は平成8年7月29日から同年9月13日にかけて実施した。
4. 遺構実測図の作成は、米澤が中心になって行い、千代森亜矢（愛媛大学）・野口虎男・中原貞良・浜田寛・坂元トミ子・大盛祐子らの助力を得た。また、遺構分布図の作成には、テクノ・システム株式会社の遺跡調査システム“SITE”を用いた。
5. 遺物の実測は米澤・猪股幸千代・池谷香代子・雁野あつ子・水光弘子が、製図は米澤が行った。
6. 遺構・遺物の写真撮影は、米澤が行った。また、遺構の空撮は（株）スカイサーベイに委託した。
7. 使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
8. 本書の執筆は、第1・2・3・5章を米澤が行い、第4章の自然科学分析については（株）古環境研究所の杉山真二氏に調査・執筆を依頼した。なお、編集は米澤が行った。
9. 本書を執筆するにあたっては、都城市文化財専門員重永卓爾氏、宮崎県文化課石川悦雄氏、都城市教育委員会主査矢部喜多夫氏、同主事桑畠光博氏・横山哲英氏らのご教示を得た。
10. 本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・保管している。
11. 本書では、下記の通りの略号を用いている。

SA - 壁穴住居

SC - 土坑

SD - 溝状遺構

SF - 道路状遺構

目 次

巻頭口絵 遺跡遠景

序 文

例 言

目 次

第1章 序説	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3章 調査の記録	4
1. 調査の経過と概要	4
2. 遺跡の層序	4
3. 縄文時代の遺物	9
4. 弥生時代の遺構と遺物	9
5. 包含層内出土の弥生土器	10
6. その他の遺構	18
第4章 自然科学分析調査報告書	20
I. 大浦遺跡における植物珪酸体分析	20
II. 大浦遺跡における種実同定	24
III. 大浦遺跡における放射性炭素年代測定結果	26
第5章 まとめ	27
1. 縄文土器について	27
2. 弥生土器について	27
3. 遺構について	28

挿 図 目 次

第1図 遺跡立地図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 基本土層図	4
第4図 遺構配置図	5～6
第5図 土層断面図	7
第6図 縄文土器実測図（1）	8
第7図 縄文土器実測図（2）	10

第8図	SA01 実測図	11
第9図	SA01 土層断面図	12
第10図	SA01 内出土土器実測図（1）	13
第11図	SA01 内出土土器実測図（2）	14
第12図	SA01 内出土鉄製品・軽石製品実測図	15
第13図	弥生土器実測図	16
第14図	SD01・SF01・02・03 実測図	17

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	19
-----	---------	----

図 版 目 次

図版1		33
図版2		34
図版3		35

1. 調査に至る経緯

平成7年5月25日付で、都城市道路建設課より同市教育委員会へ都城市梅北町の市道大浦371号線の拡幅に伴う埋蔵文化財の有無の照会がなされた。当該地は昭和62年に同市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査による市内遺跡番号7017・大浦遺跡に含まれており、縄文～近世の遺物の散布が確認されていた。そこで都城市教育委員会では、遺跡の状態をより具体的に把握するために、平成7年9月12・13日、拡幅予定地に2m×2mのトレンチを3ヶ所に設け、試掘調査を実施した(図2)。その結果わずかな擾乱が見受けられたものの、遺物包含層の遺存状態は良好で、同層より弥生時代の土器を検出した。これにもとづき、都城市と同市教育委員会の間で協議した結果、拡幅全予定地約220m²において記録保存のための発掘調査を実施することとなり、平成8年7月5日には、両者間において「臨時地方道整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」が結ばれた。現場における発掘調査は平成8年7月29日から同年9月13日まで行い、引き続き遺物の整理を行った。

2. 調査体制

発掘調査は都城市から同市教育委員会が委託を受けて実施し、経費の運用は同市教育委員会文化課が行った。調査の組織は以下の通りである。

〔調査責任者〕 都城市教育長 隈 元 幸 美

〔調査総括〕 都城市文化課長 遠 矢 昭 夫

〔調査事務局〕 同文化課長補佐 永 野 元 保

　　同文化財係長 中 村 久 司

　　同 主 査 矢 部 喜 多 夫

〔調査員〕 同 主 事 米 澤 英 昭

〔発掘作業員〕 久留 保 阿久根敏恵 吉村 則子 藤田フチ子 岩切ユキ子

　　蒲生ミツ子 宮元 孝子 南 スミ子 立山 君子 下田代清海

　　野口 虎男 坂元トミ子 中原 貞良 永田 敏雄 大盛 祐子

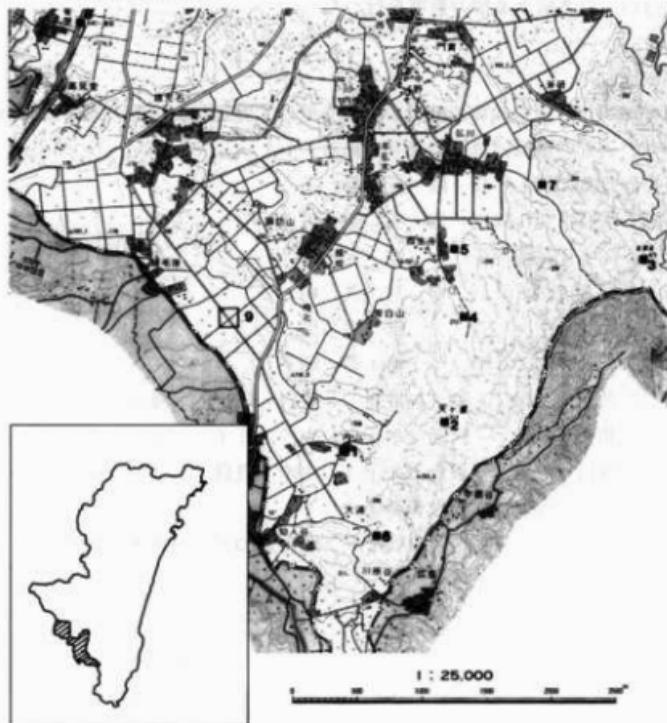
　　森 茂夫 千代森亜矢

〔整理作業員〕 猪股幸千代 池谷香代子 駒野あつ子 水光 弘子

第2章 遺跡の位置と環境

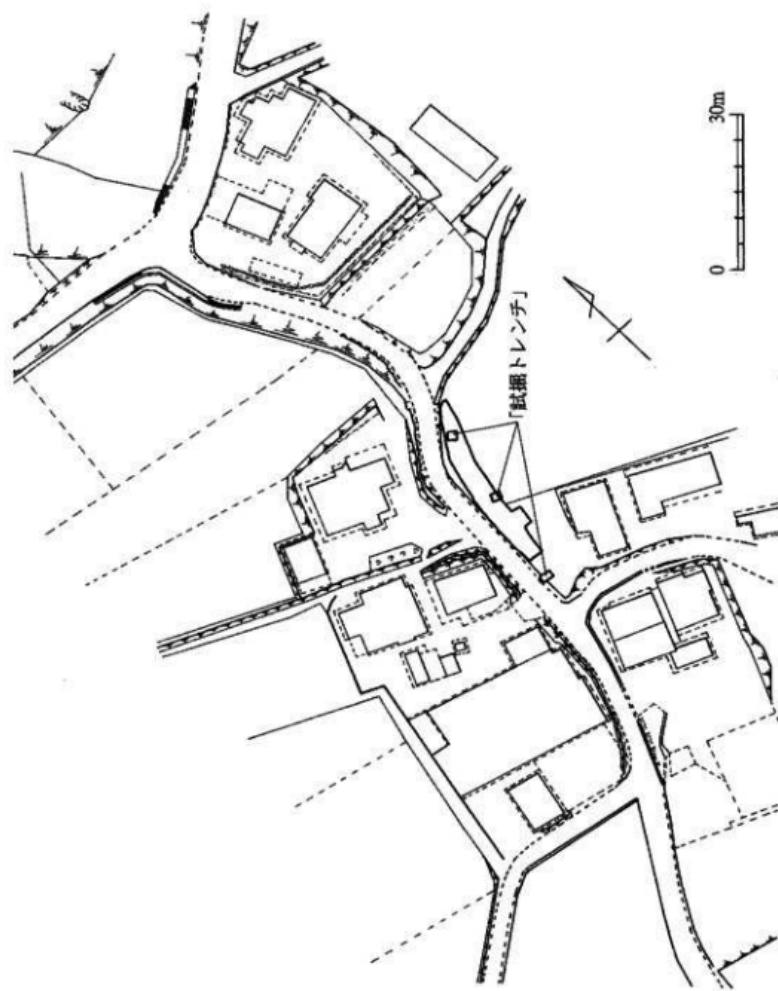
大浦遺跡（市内遺跡番号7017：第1図-1）は宮崎県都城市梅北町10585他に所在する。都城市は宮崎県の南西部に位置し、東の鰐塚山系、北西の霧島山系といった山々に囲まれた盆地のほぼ中央部にある。当遺跡は、鰐塚山系南端と都城盆地の境界付近にあり、標高約200mの段丘上（シラス台地上位面）に立地する。周辺には、中世の砦跡といわれる天ヶ峯（第1図-2）や金御岳遺跡（同3）、中世～近世寺院跡である西生寺跡（同4：平安、同5：近世）千手院跡（同6）、勝軍院跡（同7）、近世の道標である今町一里塚（同8）、縄文～中世の遺物が採集されている緩毛原第2遺跡（同9）等が立地しており、盆地南端部であるものの、縄文～近世にかけて、当地一帯が生活文化の営みの場であったことが窺える。また、寺院跡が多く、板碑等もあることから、特に中世においては信仰的な一面を強くもつ地域であったといえよう。

1. 大浦遺跡
2. 天ヶ峯陣跡
3. 金御岳遺跡
4. 西生寺跡（平安）
5. 西生寺跡（近世）
6. 千手院跡
7. 勝軍院跡
8. 今町一里塚
9. 緩毛原第2遺跡



第1図 遺跡立地図

第2図 遊跡周辺地形図



第3章 調査の記述

1. 調査の経過と概要

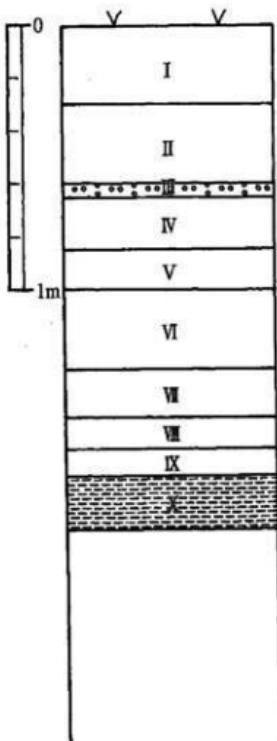
発掘調査は道路敷設全予定地 (220m^2) について実施したが、地層の傾斜方向に合わせて、南北に細長いかたちとなつた。

また、試掘調査において確認していた遺物包含層は霧島御池起源の縄文中期頃（約4,200年前）噴出と推定されている降下軽石を含む黒色系土層（IV・V層）である。調査はこれに基づき、バックホーによって表土（I・II層）を剥ぎ取り、また現状は山林であったため、木根の除去も同時に行ったのち、 $5\text{m} \times 5\text{m}$ のグリッドを設け、その後、VI層上面まで手作業で掘り下げた。なお、現場における調査期間は平成8年7月29日から9月13日までである。

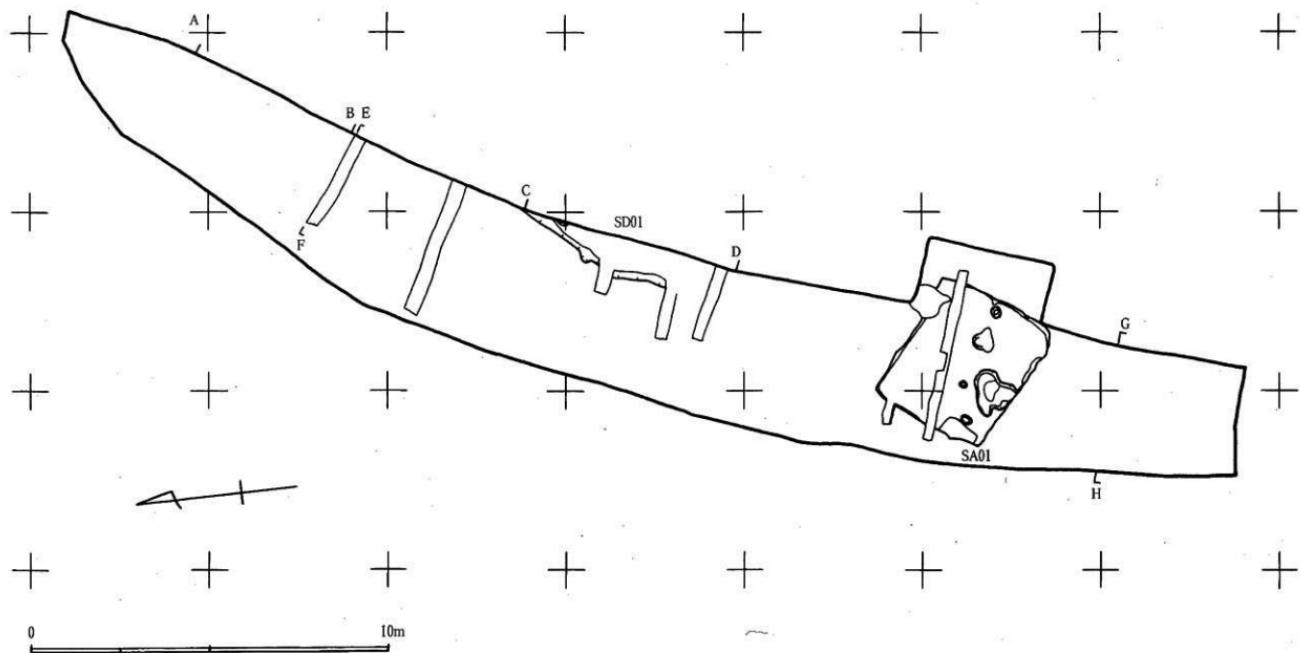
2. 遺跡の層序

本遺跡調査区域の地層は南から北へ向けて緩やかに傾斜している。ここには都城盆地内、特に北部で頻出する霧島御池起源の降下軽石層が存在しないが、この軽石が含まれる層があり、かつこれが遺物包含層となっている（ここではIV・V層が遺物包含層である）。土層断面図を図3に示した。以下、各層について説明する。

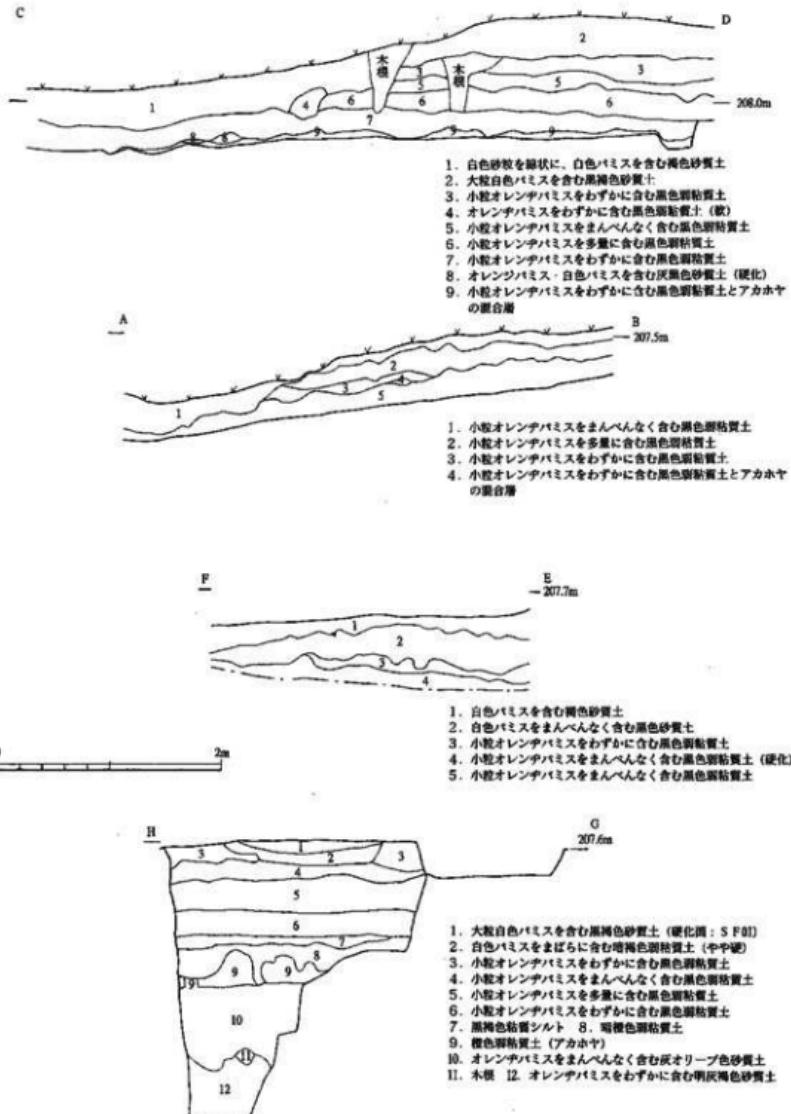
- I層：白色バミスを含む褐色砂質土（旧耕作土）
- II層：白色バミスを含む黒褐色砂質土（旧耕作土）
- III層：白色バミス
- IV層：小粒オレンヂバミスをわずかに含む黒色弱粘質土
- V層：小粒オレンヂバミスをまんべんなく含む黒色弱粘質土
- VI層：小粒オレンヂバミスを多量に含む黒色弱粘質土
- VII層：小粒オレンヂバミスをわずかに含む黒色弱粘質土
- VIII層：黒褐色粘質シルト（VIとVIIの漸移層）
- IX層：暗橙色粘質土（アカホヤ）
- X層：アカホヤ火山灰（約6,300年前）



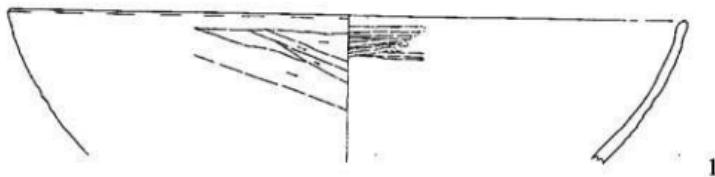
第3図 基本土層図



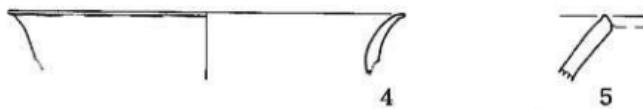
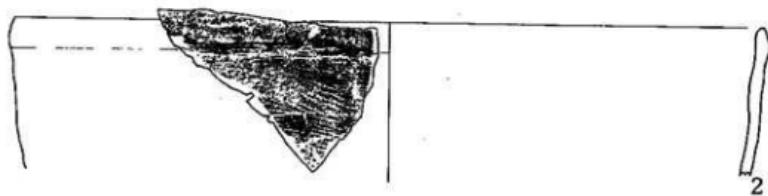
第4図 遺構配置図



第5図 土層断面図



0 10cm



0 10cm



第6図 繩文土器実測図（1）

3. 繩文時代の遺物

当遺跡の遺物包含層であるIV層より縄文時代後～晩期の遺物が出土した（図6・7）。1は鉢である。外面はナデ調整、内面はミガキが施されている。2は深鉢、3～5は浅鉢で、6～8は深鉢である。2は粗製で、外面口縁下部に粗いケズリ調整による稜をもつ。3・4は精製の浅鉢（黒色磨研）で、3が口縁部、4は胴部である。ともに黒川式と思われる。6～8は粗製で、口縁の下部に断面三角形の突帯文をもつ。9～14は深鉢で、15は浅鉢の口縁部である。9～11の粗製深鉢は肩部に強い屈曲部を有する。12は外面に貝殻条痕・沈線を有するが、形式・時期とともに不明である。13は小片ではあるが、外面には横位沈線文、刺突連点文を有している。14も小片であるが、外面には凹線文が施されている。

4. 弥生時代の遺構と遺物

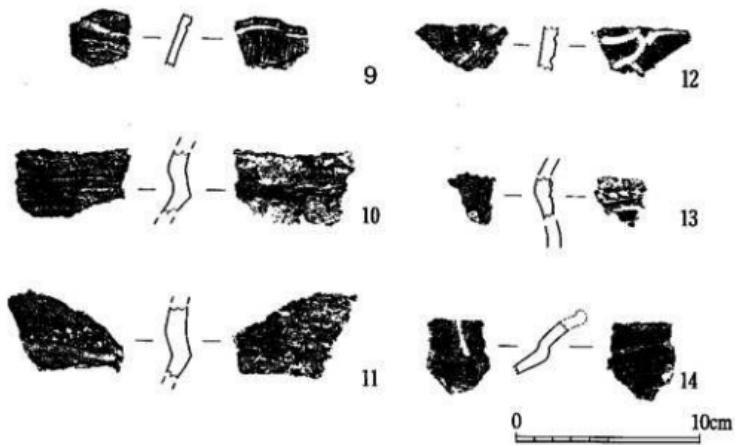
①遺構

竪穴住居跡を1基検出している。

竪穴住居跡（SA01：図8）

グリッドA・B-5・6区において検出した。検出面はVI層上である。長軸約4m、短軸約3mの方形状を呈する。検出面からの深さは0.1～0.3mを測る。覆土は小粒オレンヂバミスをまんべんなく含む黒色弱粘質土を基調とするが、土層の硬さにより2層に区分される。上層は小粒オレンヂバミスをわずかに含む黒色弱粘質土（IV層）で、下層は硬くしまった小粒オレンヂバミスをまんべんなく含む黒色弱粘質土（V層）である。両層はともに遺物を伴い、特にV層からは土器片、チャートの剥片、礫、軽石製品が出土した。SA01内のピットは明瞭ではないが、東西に近接して検出したピットは明瞭であり、本遺構とセット関係にあるのではないか（SA01の棟持柱）と思われる。

図10・11に埋土中の遺物を示した。15・16は甕である。15は頸部から口唇部へ外反する口縁部断面形で、胴部にハケ目工具による一条の刻目突帯文を有する。16は15と同型だが、粗製で現存では突帯を有しない。17は壺で、内外面ともにハケ目調整のち丁寧なミガキが施されている。また口縁部は、欠損しているものの二叉状になっていた痕跡が認められる。18～21は甕である。18は頸部から口唇部へ「く」の字に大きく外反する断面形で、頸部には器面調整によるくぼみが認められ、胎土にウンモが含まれている。19・20は小型甕である。19は頸部から緩く外反する口縁部を持ち、器壁は薄く、内外面ともにハケ目調整痕が見受けられる。20も19とほぼ同様であるが、わずかに外反の度合いが大きい。21は口唇部に耳状の突帯をもつものである。形状は二耳・四耳かは不明である。外面はススの付着が甚だしく、内面はわずかにミガキが見受けられる。22～24は甕の口縁部である。22・23はL字状口縁で、わずかに口唇部がせりあがる。24は断面M字状突帯の口縁をもつ。25は甕の口縁部で、わずかにM字状を呈している。26は甕の胴部で、工具キサミによる刻目突帯文を有し、外面突帯下部にはススが付着している。27は粗製壺の肩部である。28～33は甕の底部である。28は平底状を呈し、中実で外面にハケメ・ナデが見受けられ、胎土にウンモはみられない。29は外面にナデ・ミガキが施されており、ま



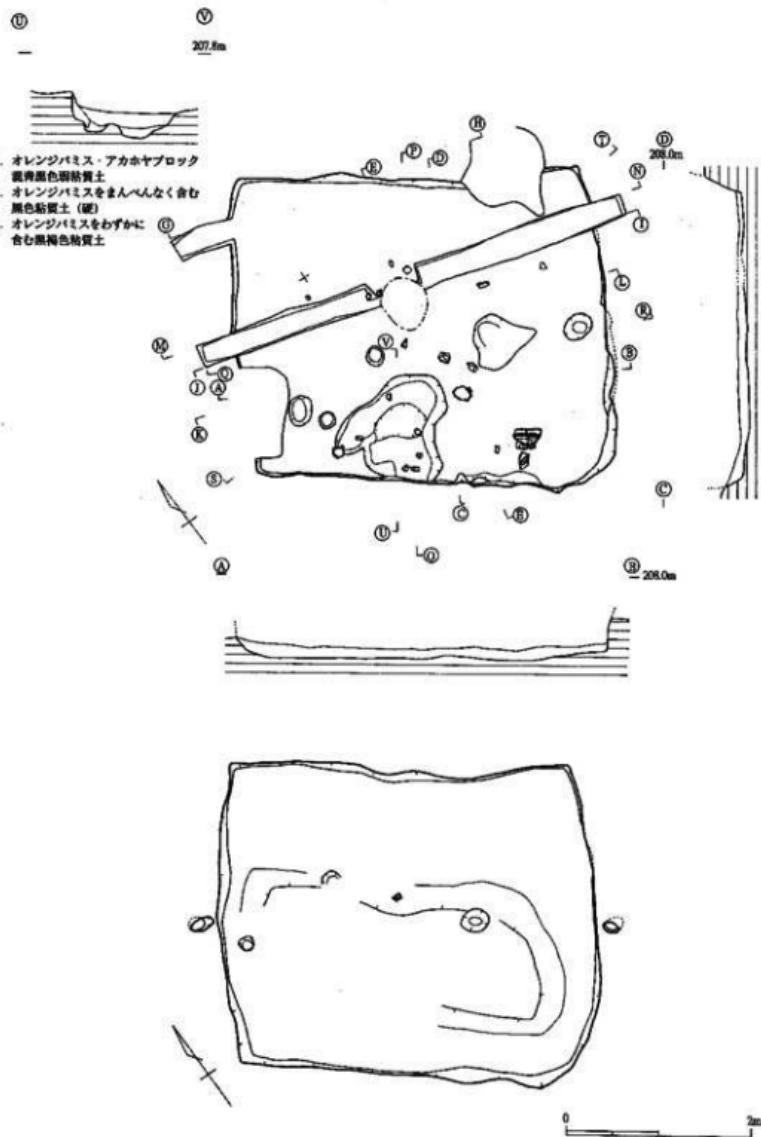
第7図 鋪文土器実測図(2)

た内面にはススが付着している。30は外面にわずかながらハケメが認められ、また胎土中にウンモが含まれている。31は若干上げ底状を呈し、ナデが施されている。32は極端な上げ底で断面中に接合面が明瞭に確認できる。33は丁寧なナデ調整がなされ、わずかに上げ底である。34は大型壺で丁寧に整形されており、底部と胴部は明瞭には区別されない。外面にはおびただしいススの付着が見受けられ、内面にはハケメ調整痕がある。35は壺底部である。外器面の調整は丁寧なナデ+ハケで、上げ底状である。底には木葉痕も不明瞭ではあるが確認できる。36は壺の底部である。外面は剥落が甚だしい。37の鉄製品は円形でほぼ中央には穿孔が施されている。直径33~34cm、穿孔の直径0.4cmと比較的小型のものではあるが、筋錘車ではないかと思われる。38・39は軽石製品である。各々不整形ではあるが、研磨されたようなくぼみが数ヶ所認められる。鉄製品等を整形・研磨するために使用されたものではないかと思われる。

5. 包含層内出土の弥生土器

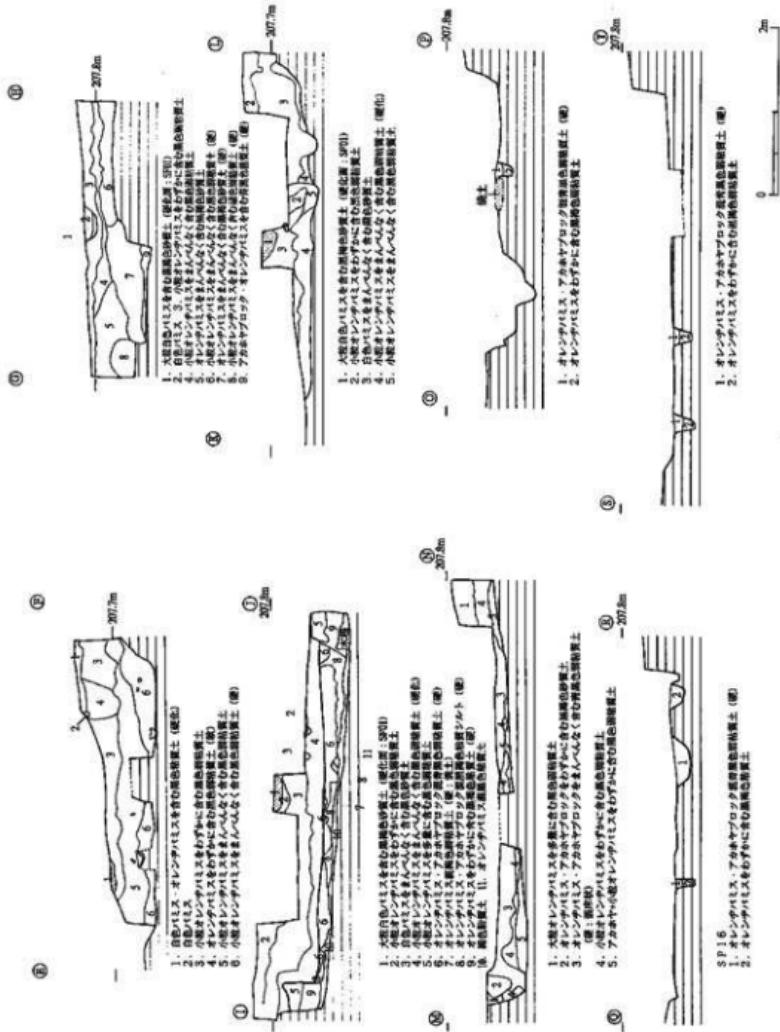
本遺跡では遺構外からも弥生土器の良好な資料を得ることができ、ここに実測しうるもののみを図示した(図13)。なお遺物包含層はIV層・V層である。

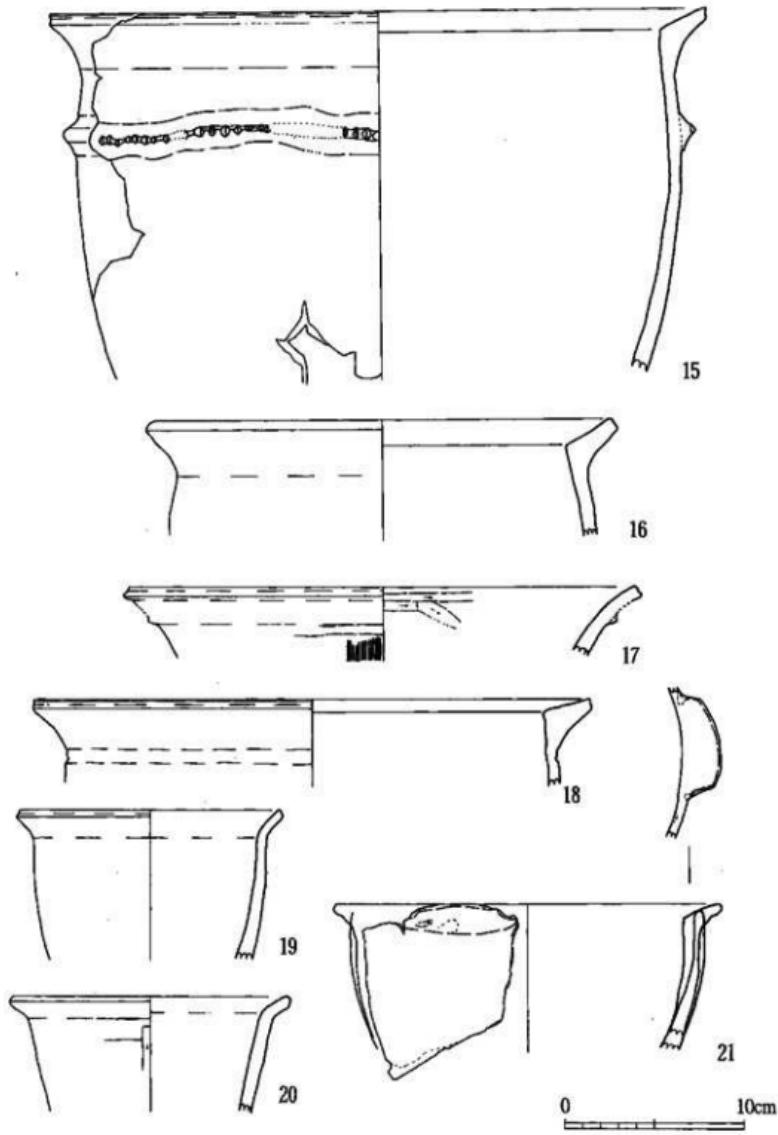
40~56は壺である。40は、頸部から口唇部へ反り上がる断面形を持つ口縁と3条の三角突帯を有するもので、外面にはススの付着が見受けられ、また胎土中にウンモが含まれる。41はL字状断面の口縁で、内外面ともに丁寧なナデが施されている。42~44は頸部から口唇部に向けて肥厚するタイプである。45は40と同様に口縁断面形が反り上がっている。46は41に類似したタイプである。47はいわゆる垂れ下がり口縁である。48~50は壺の胴部である。48は2条の三角突帯を有する。胎土中にウンモを含み、また外面にはススが付着している。49は3条の三角突帯を有し、内外面ともにナデが見受けられる。50も49と同様3条の三角突帯を有する。



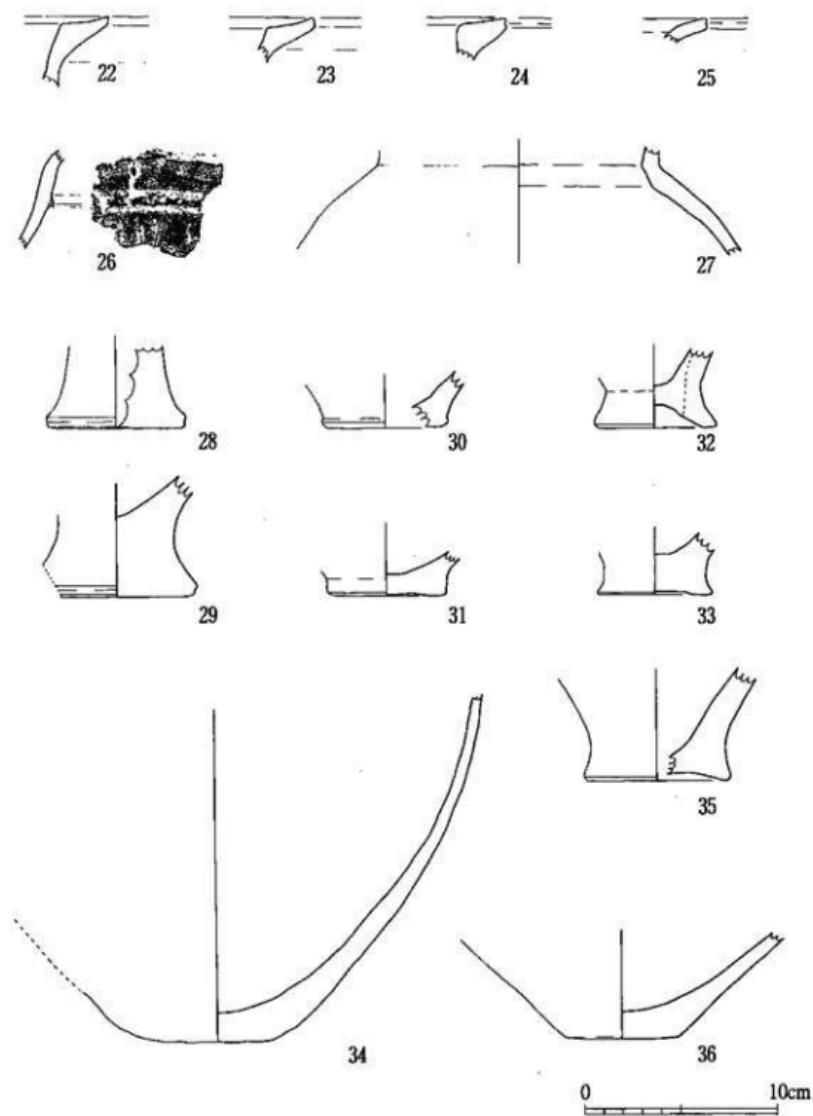
第8図 SA01実測図

図9 SA01土層断面図

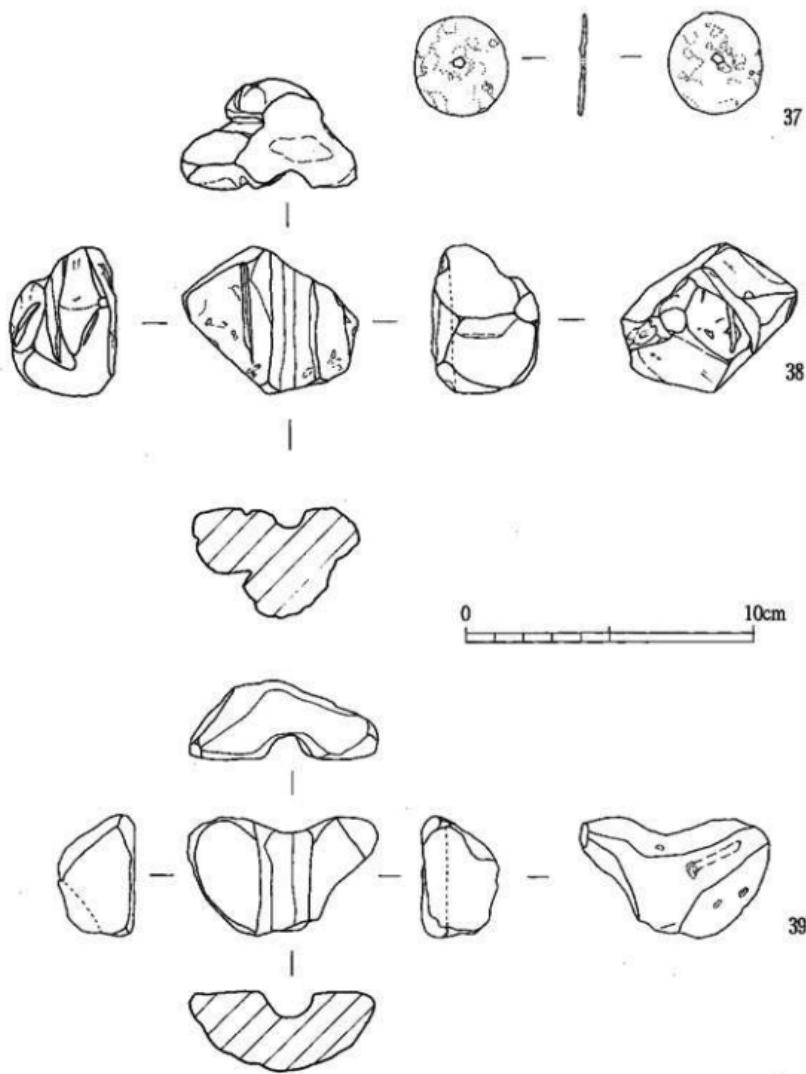




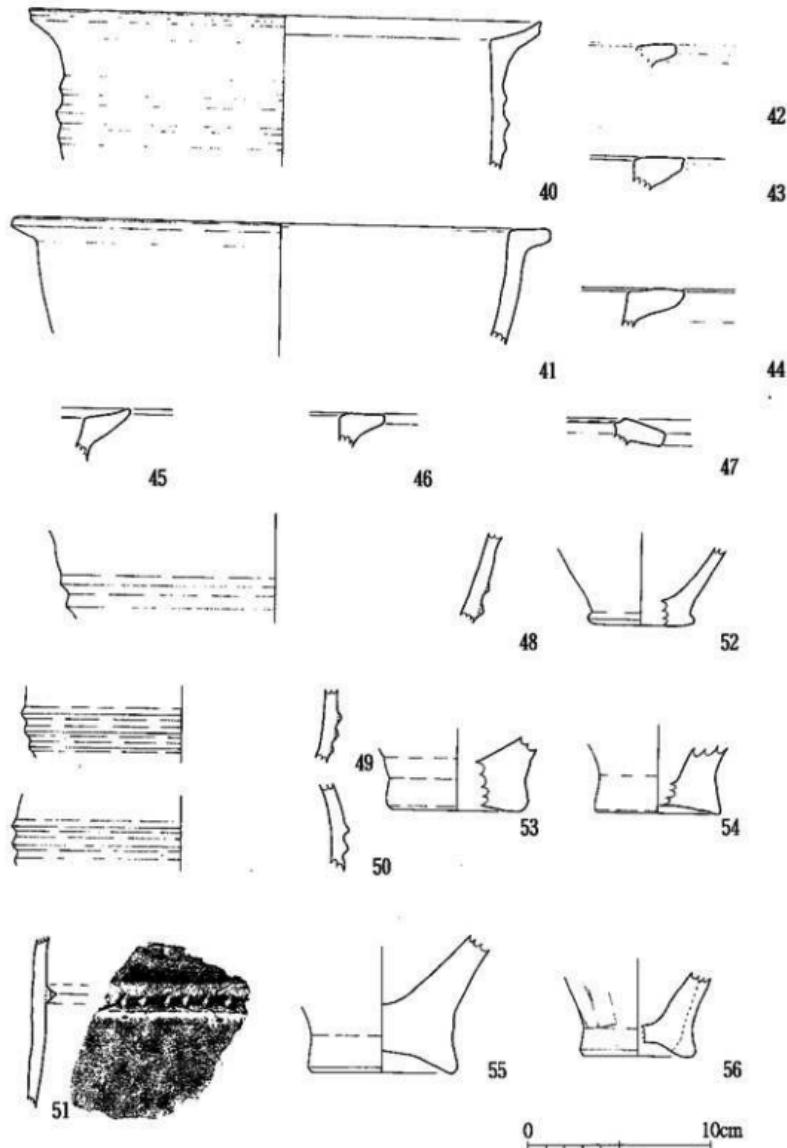
第10図 SA01内出土土器実測図（1）



第11図 SA01内出土土器実測図 (2)

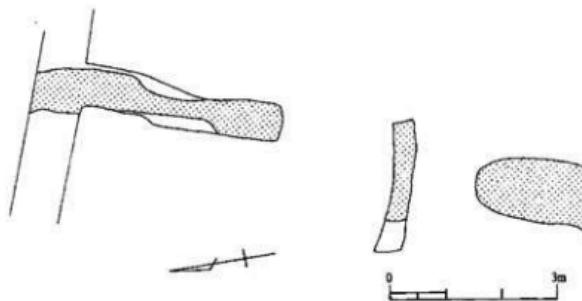


第12図 SA01内出土鉄製品・軽石製品実測図

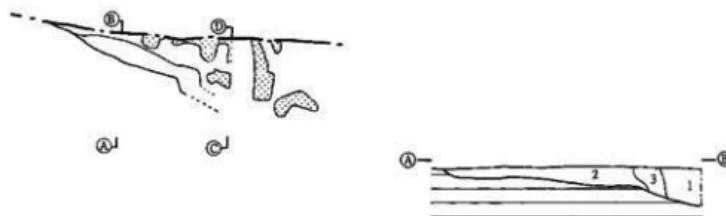


第13図 弥生土器実測図

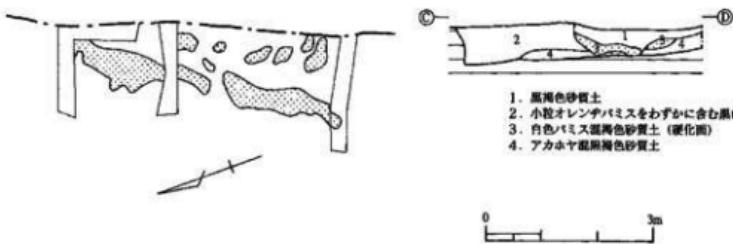
SF01



SF02



SF03



第14図 SD01-SF01-02-03実測図

6. その他の遺構

溝状遺構 (SD01 : 図14)

B - 3・4区、VI層上で検出した。南北に走行する。底はX層アカホヤに達するものの浅い。2条の道路状遺構と思われる硬化面を伴う。幅員については、本遺構が区域外に延びているため、確認できなかつた。覆土中からの遺物も検出されなかつたため、本遺構の用途、時期については不明である。

道路状遺構 (SF01 : 図14)

B - 5区からA - 6区にかけて検出した。南北に走行する。幅員は0.7~1.8m、埋土は大粒白色パミスを含む黒褐色砂質土で、直上に白いパミスがレンズ状に堆積している（断面：図9）。調査区南部よりSA01の上部を通過し、調査区北東から区外へ抜けている。

道路状遺構 (SF02 : 図14)

B - 3・4区、SD01内で検出した。南北に走行する。断片的に残存しており、幅員は不明で、遺物も確認されなかつた。埋土は白色パミス混褐色砂質土である。

道路状遺構 (SF03 : 図14)

B - 3・4区、SD01内のSF02直下で検出した。走行・残存状態ともにSF02と同様である。

出土遺物観察表

※記載について

- 1) 図番号は報告書掲載番号である。
- 2) 調整については以下の略号を用いた。

ナデ = N

ケズリ = K

ミガキ = M

ハケ = H

条痕 = J

- 3) 煤の付着しているものについては「スス付着」と注記した。

遺物 番号	遺物-器種 遺物-層	地土层 II層 III層	量				備考
			外 高	内 高	外 幅	内 幅	
1	陶文土器 片	V層 C-1-2	44.0	-	-	ナナメN	60.5×31.0
2	陶文土器 片	V層 A-5	38.5	-	-	ヨコN	ヨコN
3	陶文土器 片	V層 B-3	-	-	-	ヨコN	ヨコN
4	陶文土器 片		26.5	-	-	ヨコN	ヨコN
5	陶文土器 片	V層 C-3	-	-	-	ヨコN	ヨコN
6	陶文土器 片	V層 B-3 C-2	-	-	-	ヨコN	ヨコN
7	陶文土器 片		-	-	-	ヨコN	ヨコN
8	陶文土器 片	一様 S AII		-	-	ヨコN	ヨコN
9	陶文土器 片	一様 S AII		-	-		内側-直角切妻 外側-直角切妻
10	陶文土器 片	V層 B-3	-	-	-		直角
11	陶文土器 片	TEST		-	-	ヨコN	ヨコN
12	陶文土器 片	一様 S AII		-	-	N	外-四瓣文 内-四瓣文
13	陶文土器 片	V層 C-3	-	-	-	N	4-400EX-002 直角式
14	陶文土器 片	V層 B-5	-	-	-	ヨコN	ヨコN
15	陶生土器 片	V層 S AII	36.8	-	-	ヨコN	ヨコN
16	陶生土器 片	V層 S AII	25.5	-	-		6-333E 95% 直角
17	陶生土器 片	V層 S AII	26.0	-	-	ヨコN	ヨコN
18	陶生土器 片	V層 S AII	31.0	-	-	ヨコN	ヨコN
19	陶生土器 片	V層 S AII	14.4	-	-	ヨコN	ヨコN
20	陶生土器 片	V層 S AII	15.6	-	-	ヨコN	ヨコN
21	陶生土器 片	V層 S AII	21.7	-	-	ヨコN	ヨコN
22	陶生土器 片	一様 S AII		-	-	ヨコN	ヨコN
23	陶生土器 片	V層 S AII	8.6	-	-	ヨコN	ヨコN
24	陶生土器 片	一様 S AII		-	-	ヨコN	ヨコN
25	陶生土器 片	一様 S AII		-	-	ヨコN	ヨコN
26	陶生土器 片	V層 S AII	8.6	-	-	ヨコN	ヨコN
27	陶生土器 片	V-V層 S AII	8.6 C-2	-	-	ヨコN	ヨコN
28	陶生土器 片	V層 S AII	A-6	-	7.2	ヨコN	ヨコN

遺物 番号	遺物-器種 遺物-層	地土层 II層 III層	量				備考
			外 高	内 高	外 幅	内 幅	
29	陶生土器 片(底部)	V層 S AII	B-6	-	6.2	-	タテN タテM
30	陶生土器 片(底部)	S AII		-	5.9	-	タテN
31	陶生土器 片(底部)	V層-一様 S AII		-	6.2	-	ヨコN
32	陶生土器 片(底部)	S AII		-	5.6	-	ヨコN N
33	陶生土器 片(底部)	V層 S AII	B-6	-	6.0	-	ヨコN
34	陶生土器 片(底部)	V層 S AII	A-6 B-6	-	5.5	-	タテN ヨコN
35	陶生土器 片(底部)	V層-一様 S AII	B-6	-	7.2	-	ヨコN
36	陶生土器 片(底部)	V層 S AII	B-6	-	5.6	-	
37	鐵製品	V層 S AII	B-6	-	-	-	直径-33-36mm 厚さ-1.5mm
38	鐵製品	V層 S AII	B-6	-	-	-	
39	鐵製品	V層 S AII	A-6	-	-	-	
40	陶生土器 片	TEST 直(13mm)		-	ヨコN	ヨコN	ヨコN ヨコN ヨコN
41	陶生土器 片	TEST 直		-	ヨコN	ヨコN	ナナメN ナナメN
42	陶生土器 片(13mm)	TEST 直		-	-	ヨコN	ヨコN
43	陶生土器 片(13mm)	V層 B-3		-	-	ヨコN	ヨコN
44	陶生土器 片(13mm)			-	-	ヨコN	ヨコN
45	陶生土器 片(13mm)			-	-	ヨコN	ヨコN
46	陶生土器 片(13mm)			-	-	ヨコN	
47	陶生土器 片(13mm)			-	-	ヨコN	ヨコN
48	陶生土器 片(底部)	V層 B-6		-	-	ヨコN	ヨコN
49	陶生土器 片(底部)	TEST 直		-	-	ヨコN	ヨコN
50	陶生土器 片(底部)	TEST 直		-	-	ヨコN	ヨコN
51	陶生土器 片(底部)	TEST 直		-	-	ヨコN	ヨコN
52	陶生土器 片(底部)			-	8.3	-	一様ヨコN
53	陶生土器 片(底部)			-	7.8	-	
54	陶生土器 片(底部)			-	6.8	-	
55	陶生土器 片(底部)			-	7.5	-	直-直角より 圓錐形あり
56	陶生土器 片(底部)			-	6.6	-	ヨコN

出土遺物観察表

I. 大浦遺跡における植物珪酸体分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_4) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 1987）。

2. 試料

試料は、SA01住居跡の床面から採取されたNo261とNo263の2点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾 (105 °C · 24時間)
- 2) 試料約1 g を秤量、ガラスピース添加 (直径約40 μm · 約0.02 g)
※電子分析天秤により1万分の1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法 (550 °C · 6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300 W · 42KHz · 10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 (20 μm以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^5 g ）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。スキ属型（スキ）の換算係数は1.24、ネササ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群につい

て定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族型、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、Bタイプ、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

（2）植物珪酸体の検出状況

SA01住居跡の床面から採取されたNo261とNo263について分析を行った。その結果、タケ亜科（未分類等）や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族やネザサ節型も比較的多く検出された。また、ススキ属型、クマザサ属型、海綿骨針なども検出された。植物珪酸体密度は、ほとんどの分類群でNo263の方がNo261よりもかなり高くなっている。

5. 考察

当時の遺跡周辺は、ネザサ節などのタケ亜科を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったものと推定される。No263の方がNo261よりも植物珪酸体密度がかなり高くなっていることから、これらの植物が住居跡において何らかの形で利用されていた可能性が考えられる。

参考文献

- 杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第2号、p. 27-37.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学、9、p. 15-29.

表1 都城市、大浦遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 \ 試料	SA01住居床面	
	261	263
イネ科		
キビ族型		6
ススキ属型	15	24
ウシクサ族	44	223
Bタイプ		12
タケ亜科		
ネザサ節型	133	236
クマザサ属型	37	54
メダケ節型		18
未分類等	333	755
その他のイネ科		
表皮毛起源		6
棒状珪酸体	607	1232
茎部起源		6
未分類等	570	834
(海綿骨針)	111	42
植物珪酸体総数	1741	3407

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

ススキ属型	0.18	0.30
ネザサ節型	0.64	1.13
クマザサ属型	0.28	0.41

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

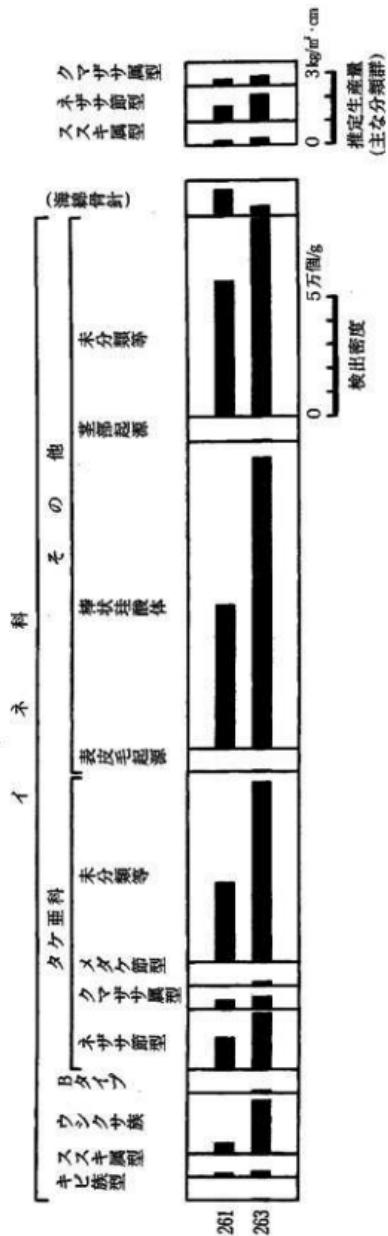


図1 大浦遺跡、SA01住居床面における植物珪酸体分析結果

II. 大浦遺跡における種実同定

1. 試 料

試料は、SA01住居跡の床面から採取された堆積物（試料Ⅰ）である。

2. 方 法

試料（堆積物）400ccを0.25mm篩を用いて水洗選別を行い、双眼実体顕微鏡下で観察した。同定は形態的特徴および現生標本との対比を行い、結果は同定レベルによって階級で示した。

3. 結 果

樹木1、草本1の計2が同定された。学名、和名および粒数を以下に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

表1 SA01住居跡床面の種実同定結果

分類群（学名/和名）	部位	個数	
Cryptomeria japonica D.Don	スギ	種子	1
Gramineae	イネ科	果実	1

〔樹木〕

a. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don 種子 スギ科

茶褐色で長楕円形を呈し、狭い側翼がある。長さ62mm、幅27mm

〔草本〕

b. イネ科 *Gramineae* 果実

炭化しており黒褐色で円形を呈す。胚の部分はとれて窪んでいる。長さ22mm、幅19mm。

4. 考 察

SA01住居跡の床面からは、スギ種子とイネ科果実が検出された。スギは温帯の中間域を中心に分布する樹木である。イネ科には人里植物が多く、周囲の日当たりのよいところに生育していたと推定される。

参考文献

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494p.

大浦遺跡出土種実



1 スギ種子

— 1 mm —



2 イネ科果実

— 0.5mm —

III. 大浦遺跡における放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SA01No147, 22	土器付着煤	酸-7%カリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量分析 (A M S) 法
No.2	SA01No258, 214, 248	土器付着煤	酸-7%カリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量分析 (A M S) 法
No.3	No.122 土器付着	炭化物	酸-7%カリ-酸洗浄 石墨調整	加速器質量分析 (A M S) 法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年 B P)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	層年代 交点 (1 σ)	測定No. (Beta-)
No.1	2010 ± 40	-25.8	2000 ± 40	AD15 (BC35～AD65)	100652
No.2	2070 ± 40	-27.8	2030 ± 40	BC20 (BC50～AD20)	100653
No.3	2890 ± 70	-28.0	2840 ± 70	BC990 (BC1065～905)	100654

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (1950年AD) から何年前 (BP) かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5,568年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位対比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位対比から千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 層年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を補正することにより算出した年代 (西暦)。補正には年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値を使用した。この補正是10,000年BPより古い試料には適用できない。層年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と層年代補正曲線との交点の層年代値を意味する。1 σ は補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した層年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1 σ 値が表記される場合もある。

当遺跡は、結果的には220m²という矮小な面積でかつ遺構密度の粗な遺跡であったが、発掘調査件数の少ない都城盆地南部において、縄文～弥生の貴重な資料を提供してくれた。ここで当遺跡出土の遺物・遺構について、若干の整理を行いまとめとする。

1. 縄文土器について

当遺跡では、縄文時代の遺構は検出されていないが、わずかに土器が出土している。3・4は黒色研磨の黒川式で、同系統が市内正坂原遺跡から出土しているが、時期的に当遺跡の方があわざかに遅れるようである。6・7・8は松添式と思われるものである。10・11は粗製深鉢の肩部であるが、極端な屈曲部を有することから、黒川式の3・4と同時期のものと考えられる。12については指宿式に該当する沈線文土器で、13についても深鉢の頸部で、その文様から西平式と思われる。このように、型式のバリエーションはあるものの、縄文後～晩期に属するものがほとんどである。

縄文後～晩期の遺物は市内各地で確認されている。ここに当遺跡で確認した遺物の市内における分布状況を挙げておく。黒川式は上述の正坂原遺跡等各遺跡で見受けられる。松添式は市内南部詳細分布調査において散見される。指宿式についても市内遺跡詳細分布調査において当大浦遺跡から計6点、梅北町下久保遺跡で2点確認され、また西平式も大岩田町大岩田村ノ前遺跡・上水流町十三東遺跡より出土している。

2. 弥生土器について

当遺跡において竪穴住居跡の検出は1軒にとどまったが、これに伴う非常に興味深い土器資料を得ることができた。

15は甕であるが、その口縁部の断面形態は、「く」の字状で胴部は膨らみを持たない。また頸部直下に一条の刻目突帯文を有している。底部は現存しないが、おそらく内溝気味に立ち上がる上げ底状のものが付くと思われる。口唇部から突帯にかけてはヨコナテが施され、突帯から下にはタテ及びナナメのハケ目が見受けられる。この断面形態は山之口式と類似しているが、突帯は一条でありかつ刻目を持つところが異なる。また、この刻目はハケ目工具によるもので、その施文状態や器面の調整方法から中溝式に通ずるものと考える。

山之口式は、石川悦雄によればIVa期の後期初頭、中園聰によれば4期の中期後半、河口貞徳の第V様式に比定される。中溝式もまた、石川のIVb期（中期後半）に該当するものである。その分布圏については、山之口式が大隅半島、中溝式が宮崎平野であるのは周知のことであるが、当遺跡で表採資料として山之口式甕が確認されており、また、市内本池遺跡では中溝式が出土している。このことから、当地域はその双方が混在する部分にあたることが想定され、当遺跡もこの範疇におさまると考えられる。ちなみに、堂地東遺跡竪穴住居跡内出土土器に類似

したものがあるが、当資料と比較すると、若干胴部が膨らみを帯びている。甕脚部についても、本遺跡からは大略して2パターンのものが出土している。1つは底部端に明瞭に稜を持ち、底部端から内湾の内湾外反して胴部にいたる中実の平底タイプで、もう1つは底部端からの内湾がほとんどみられない上げ底タイプである。前者は山之口式に類似し、後者は中溝式の特徴と思われ、またこれらが同一遺構内より出土していることからも当地域はその双方が混在する部分にあたることが窺える。ともかく、この15甕については現段階では他に照合資料を見出しえないため、以上述べたことは推論の域を出ないが、今後の中期後半～後期前半における当地域の生活の在り方を考えていく上で、非常に有用な資料であろう。

この他にも注目すべき資料が数点見受けられる。まず、口唇部に耳状の突帯を有する甕であるが、これについても現在のところ他に類似すべき資料を見出しえない。上記遺物と共に今後の資料の増加が待たれるところである。また軽石製品が竪穴住居跡内より出土しているが、その形状は不整形で、使用痕とみられる半円状の凹みを持つ。この凹みは鉄製品等を研磨した跡かと思われるが、詳細は不明である。

3. 遺構について

遺構は道路・竪穴住居跡・溝状遺構のみである。

道路・溝状遺構とともに遺物や層位的見地からもその年代は不明である。直上に15c後半に噴火した桜島の火山灰（文明軽石）が堆積していたS F 01以外は、時代区分としては比較的新しいかも知れない。

竪穴住居跡は上述したように1軒であるが、覆土中には弥生中期後半を主体とした遺物が確認されている。この住居跡は南側から延びる台地の北端に立地し、その北側は谷地形で、湧水を伴う。地層も調査区ほぼ中央が最も標高が高いため、南北へ下りぎみに（北側は急）褶曲しており、また、北東部の山地中腹では磨製石斧が多数採集されている。こういったことから、当遺跡やや東南に集落が営まれ、今回の調査ではその北端部を垣間見たものと推察され、遺物の型式より、宮崎平野部・大隅地方双方の影響を多分に受けていた性格を合わせ持っていたと思われる。

引用・参考文献

- ・関俊彦「弥生土器の知識」東京美術
- ・中村直子1992「南部九州における弥生土器の編年研究に関する問題」
『南九州地域における原始古代文化の諸様相に関する総合的研究』鹿児島大学法文学部
- ・石川悦雄1984「宮崎平野における弥生土器編年試案 - 素描 (Mk. II)」
『宮崎考古』第9号 宮崎考古学会
- ・多々良友博1981「成川式土器の検討」『鹿児島考古』第15号 鹿児島県考古学会
- ・鹿児島県教育委員会1985「王子遺跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (34)
- ・中嶋聰1997「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号 人類史研究会

- ・大川清・鈴木公雄「工業普通編1996『日本土器事典』」雄山閣
- ・長津宗重1985「堂地東遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会
- ・矢部喜多夫1986「都城市遺跡詳細分布調査(中央部)」都城市文化財調査報告書第5集
都城市教育委員会
- ・矢部喜多夫・梶畠光博・下田代清海1990「都城市遺跡詳細分布調査(北西部)」
都城市文化財調査報告書第12集 都城市教育委員会
- ・梶畠光博・野間大作1989「都城市遺跡詳細分布調査(北東部)」
都城市文化財調査報告書第8集 都城市教育委員会
- ・矢部喜多夫・梶畠光博1987「都城市遺跡詳細分布調査(南部)」
都城市文化財調査報告書第6集 都城市教育委員会
- ・重永卓爾1991「大岩山村ノ前遺跡発掘調査報告書」
都城市文化財調査報告書第14集 都城市教育委員会

図 版

图版 1



遗跡全景



S A01全景



S D01



S A01内遺物出土状况

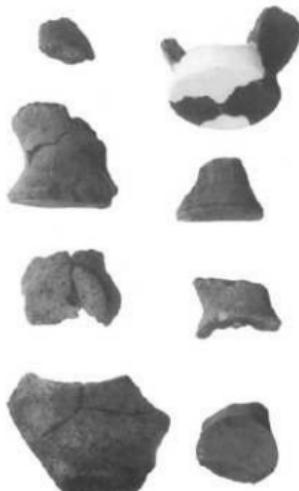
図版2



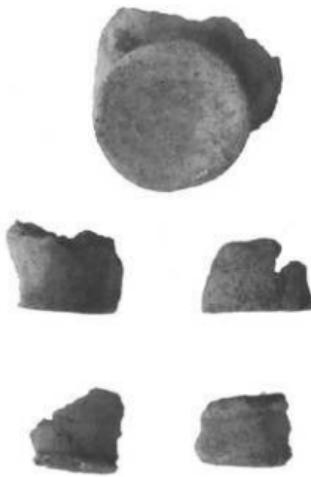
出土遺物①（縄文時代）



出土遺物②（弥生時代）



出土遺物③（弥生時代）

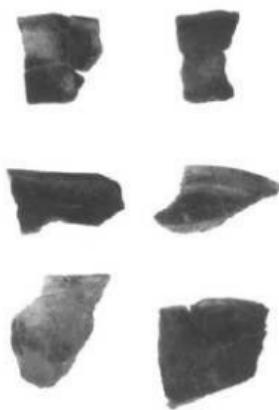


出土遺物④（弥生時代）

図版3



出土遺物⑤（弥生時代）



出土遺物⑥（弥生時代）



出土遺物⑦（弥生時代）



出土遺物⑧（弥生時代）



出土遺物⑨（弥生時代）



出土遺物⑩（弥生時代）

フリガナ	オオウライセキ					
書名	大浦遺跡					
副書名	道路建設事業「臨時地方道整備事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第37集					
編集者名	米澤英昭					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	1997年3月31日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
オオウラ イセキ 大浦遺跡	ミヤコノジョウシ 都 城 市 ウメキタチヨウアザオカラ 梅北町字大浦	31° 38' 40" 付近	131° 3' 20" 付近	1996.08.01 ~ 1996.09.20	220	道路整備 関連
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
集落跡	縄文 弥生	竪穴住居跡 溝状遺構 道路状遺構	1 縄文土器 1 弥生土器 3 軽石製品 鉄製品			

都城市文化財調査報告書第37集

大浦遺跡

1997年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会

発行 宮崎県都城市姫城町6街区21号
〒885-0555 TEL (0986) 23-9547

印刷 (有)都城新生社印刷
宮崎県都城市都北町7284-1
〒885-0004 TEL (0986) 38-3500
